イエスは主なり　浜松聖書集会報告　2016年7月10日　　（7月8日作成）
讃美歌：（２４３）ああ主のひとみ、まなざしよ／イエスは主なり（奥山正夫）
聖書：コリント信徒への第一の手紙12章3節
ここであなたがたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも「イエスは神から見捨てられよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。

はじめに：2015年6月、妻を天に送って1年の所感として、内村とパウロとバッハによって、イエスの十字架の死と復活を教えられたことを報告。畏れを識らぬ大風呂敷を広げました。また1年が経過、不十分な読み方を反省。大島守夫さん公開の黒崎幸吉注解新約聖書 web 版。一言一句大切に。／経験を通して、素読。先達の業績を感謝して頂きながら、生活の中で生きた言葉として。／**「真理は詩であり音楽である。それは真理は生命であり、生命は韻律たるが故である。」**（矢内原）

黒崎註解：パウロは以上の諸章に於てコリント教会の教派問題（1-4章）、道徳問題（5-7章）、偶像問題（8-10章）、礼拝問題（11-14章）を論じて後、茲に最後に最も重要なる教義の問題に立入り（15章）体の復活について詳論して居る。元来キリストの福音は体験を主として、理論的方面は之を無視する場合が多くあるけれども、茲にパウロは珍らしくも復活につき極めて理論的に之を陳述して居るのであつて、聖書中特色ある一章であると云うことが出来る。而して前半（1-34節）に於いては復活が福音の教義の重要なる部分をなして居る事、後半（35-58節）に於ては其の理論上の困難なる問題につき説明して居る。

コリント第一の手紙　全体の概略　（G．タイセン「新約聖書」教文館2003年）
霊とは、コリントの信徒たちにとっては、天に由来する奇跡的な力であって、異言と尋常ならざる賜物として現れ、人間をして今ここで超日常の領域へと「浮揚」させるものであった。脱我経験が宗教的に究極の体験と看過されていた。ここでパウロは、ガラテヤの信徒への手紙では彼自身が親近感を覚えていた熱狂主義を抑制しなければならない。彼はコリントの信徒たちに次のことを示そうとする。すなわち、**決定的に重要なことは神の臨在をいかに濃密に体験できるかではない。決定的に重要なのは、霊のエネルギーを周囲の人間たちの益になるように倫理的に方向づけること**なのだ。
教会生活により強く介入して、それを仕切らざるを得ない必然性は、宗教的「熱狂主義」がコリントで二つの要素において破壊的に作用していたことから生じた。（1）コリントの教会は社会的に均質ではなく、さまざまに異なる社会層と文化を内包していた。（2）外部からやって来た伝道者たちが、もともと内部にあった緊張関係を増幅した。
第一の手紙でのパウロは山ほどの具体的な問題を取り扱う。彼はそれらの問題に論及しながらも、その周囲に、十字架と復活という彼の宣教の二つの中心主題についての論述から成る大きな枠組みを設定する。
手紙の劈頭に置かれた「十字架の意味について」という小説教。・・・**十字架は救いの根拠である。なぜなら、神は力、身分、知恵というすべての尺度を十字架によって止揚したからである。神は、犯罪者として処刑された一介の人間と自らを同一化した時、低きも**

の、権利を奪われたものを選んだのである。神は十字架によって、この世（つまり社会）の尺度に対する根本的な自由を創造したのである。それゆえパウロはこれに続いてもろもろの論題を取り上げる場合にもいつも繰り返し、キリスト教徒が彼らを取り巻く世界と対話する能力を失わずに、しかもそのような世の尺度から自由になることを目標としている。信仰とは神が「この世の支配者たち」と事を構えた革命的な行為としての十字架を信じることである（一コリ 2.6-8）

手紙の結びではパウロは小さな段落を置いて、復活の希望を弁護している。その段落は、・・・野獣と闘わねばならなかった（一コリ 15.32）パウロと同じように、あり得べき最大の逆境に置かれようとも、不安から解放してくる。コリントでは、肉体の復活を否定する信徒たちが何人かいた。彼らにとって、肉体は朽ちるものであるが、人間的な内的な核はそうではなかった。これに対してパウロは肉体性についての異なった理解を対置する。人間はその全体が変えられるのだ。地上的な肉体は「霊的な」肉体に変えられる。このコリントの信徒への手紙ですべて肉なるものを真剣に考えるようにという警告が行われるのは、このことを強調するものである。それはセクシュアリティーと食べ物の他に舌にも属する。それは異言において制御不能となる。

これら二つの論述がその他の一連の論述を取り囲む枠組みとなっている。・・・性に関わる問題では・・・あるべき行動の基準は、肉体を神の霊の宮として高く評価することである。肉体はどうでもよいものではない。肉体に起きることは、その人が本来何者であるかに関わっている。

食事の問題では、・・・あるべき行動の基準は一方では愛、他方では良心、とりわけ他者の良心への配慮である。

言語の問題では、異言を翻訳させて教会生活のなかに統合することを目指している。

倫理的な方向づけのためにパウロは一つのイメージを基準を提示する。それは「キリストのからだ」というイメージである。このイメージでは、すべての人間が一つのからだの一部であり、その内で・・・一番弱い部分にこそ配慮が必要だとされる。あるべき行動の基準は愛である。このことを浮き彫りにするために、パウロは有名な愛の賛歌を紡いだ。（一コリ 13.1）

コリントの信徒への手紙一第 15 章の区分、
新共同訳では 3 つ。1 キリストの復活 (1-11)、2 死者の復活 (12-34)、3　復活の体 (35-58)

黒崎注解による区分　復活論に就て 15:1 - 15:58

1. 体の復活は救の根本なり　15:1 - 15:34
   - イ．キリストの復活の事実なる事　15:1 - 15:11
   - ロ．復活を信ぜざる結果　15:12 - 15:19
   - ハ．キリスト復活の意義　15:20 - 15:28
   - ニ．復活と生活との関係　15:29 - 15:34
2. 復活体の実質　15:35 - 15:52
   - イ．復活力の根源　15:35 - 15:38
   - ロ．復活体の性質　15:39 - 15:49

ハ．再臨の時に生存し居る信者の化体　15:50 - 15:52

3. 復活の凱歌　15:53 - 15:58

Ⅰ．第一段落　キリストの復活 (1-11)

コリント信徒への第一の手紙 15 章 1 節－ 8 節　**兄弟たち、わたしがあなたがたに告げ知らせた福音を、ここでもう一度知らせます。これは、あなたがたが受け入れ、生活のよりどころとしている福音にほかなりません。**どんな言葉でわたしが福音を告げ知らせたか、しっかり覚えていれば、あなたがたはこの福音によって救われます。さもないと、あなたがたが信じたこと自体が、無駄になってしまうでしょう。**最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと**、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは既に眠りについたにしろ、大部分は今なお生き残っています。次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、**そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。**

：パウロは第二回伝道旅行でコリントを訪れた。今戦乱の中にあるシリア北部のアンテオケアから北西に向かって進み、トルコ地方の西端トロアスで見た幻によって始まります。海を渡りマケドニア州に行き、フィリピで紫布を扱う婦人商人リディアに出会う。ここに教会が出来る。その後テサロニケ、アテネを通過し、アカイア州コリントに。パウロは複数回コリントを訪れている。1 回目の滞在時、総督はネロ皇帝の家庭教師だった**哲学者セネカの弟のガリオ**だった (使徒行伝 18:1-18)。パウロはこのとき 18 ヶ月コリントに滞在。人口 60 万人の大都会。様々な民族文化の混淆地帯、アフロディティーの神を祀っていた。幸運繁盛快楽の神。BC9 世紀から続く港湾都市。中国がギリシャ最大の港ピレウス港に開発支援（7 月 6 日朝日）。アテネ南西部、コリントはそこから車で 1 時間、徒歩 14 時間のところにある。内村鑑三：「コリントとアテネを京都と大阪、札幌と小樽になぞらえて、大学町と商業地。京都に同志社をつくった新島襄君は間違った。札幌は有島武郎、村松松年の文士学者が無神無霊魂を唱えた。日本橋京橋は本郷早稲田よりも善い。世界の諸大学においてキリスト教が消えても恐るるに足りない。商人、職工、百姓は之を捨てない。」コリントでローマから来たアキラとプリスキラに出会う。共にテント造り。安息日ごとに会堂でユダヤ人やギリシャ人の説得に努めた（使徒言行録 18 章 1-4 節）。

恐れ：**「そちらに行ったとき、わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした」**（コリント一 2 章 3 節）アテネで失敗したパウロを神さまが幻の中で励ます。**「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。」**（使徒 18 章 9，10 節）：恐れについて。7 月 4 日 NHK テレビ、こころの時代では安積力也さんが話し、つづいてラジオで宮田光雄さんがカールバルトの評伝を出したことを話す。安積力也さんは「何をおそれるか、本来の私を生きる」と題して基督教独立学園での 7 年間の校長を経て。生徒達との交流。3 年間で変容する姿。生徒への問い、「あなたの恐れているものはなんですか？」人が怖い。親が怖い。自らの恐れを直視、本当に恐るべき者を畏れる。宮田光雄さんは「われ弱くとも恐れはあらじ、神学者バルトの信仰」と題して。人間がなす事はど

んな事も絶対視せず、冷めた目で時代を見つめ、ナチスへの抵抗運動をけん引したバルトの信仰を語った。バルトが告白教会を組織し、バルメン宣言を起草したこと、神の支配を強調し、偶像崇拝を否定したことなどを 60 年前に直接師事した体験談を交えた。「主われを愛す、恐れはあらじ」母の胸で聞いた讃美歌をバルトが講義のなかで取り上げたエピソード。

＊ 15 章の突然飛躍するように感じられるのは何故か。15 章 1-11 節を読んで、1，2 章との呼応を思う。（1 章 23 節　わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。／2 章 2 節　イエス。キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていたからです。）

また太田愛人がカール・バルトの言葉を紹介。「死人の復活についての章は、第一コリント書の脈絡全体の中で一見そうらしく思えるほど、それほど孤立しているのではない。この章は前書簡の結論および最頂点をなすのみならず、実際また鎖鑰点（戦略拠点）をなしている。そこから光が全体に投ぜられ、そこから本書が外面的にではないまでも、内面的に統一あるものとして理解される」

矢内原忠雄は「彼は多くの小うるさき実際問題について忍耐強く一々懇切に教訓と意見とを述べてきたが遂に我慢しきれなくなって律法の完成、能力の道として愛の賞賛を爆発した。それから復暫く教会内の秩序に関する実際上の心得を説いていたがまもなく第二の大爆発を為した。これが復活の論証である。」

「何故にパウロは復活の論証に就いてかくも情熱を傾けたか。事が福音の中心問題根本原理に関するが故である。蓋し原理の把握が鞏固であれば、個々の実際問題についての態度の決定は、各人自身おのづから之を解決し得るであろう。又直ちにそれを解決し得ずとも焦燥することなく、静に時の教訓と治癒を待つことが出来る。よしんばその解決が誤謬であった場合でさえも決して落胆することなくまもなく健全なる立場に復帰するを得るのである。（原理＝生命）」

：いったんはコリントの人々が、パウロの福音を受け入れた。しかも、教義としてではなく、具体的に生きた、**生活の拠り所**としていた。

文語訳　之に頼りて立ちたり。／口語訳　それによって立ってきたあの福音／塚本訳　それに立っている、あの（死人の復活についての）福音である。／前田訳　その中にお立ちです。／ NIV　　on which you have taken your stand.

3-5 節「わたしも受けたもの」：パウロも自分の言い出したことではなく、伝えられたこととして。パウロの宣教が教会の伝承を信仰告白として語り伝えることだった。

「**使徒パウロによる最古の復活証言**」（私の聖書物語 120 頁　宮田光雄）**「それをパウロが教会的伝承として受け取ったのは、ダマスコ途上の召命体験後まもない頃、おそらく紀元 30 年代半ばにまで遡りうる時期、あるいは遅くとも彼が宣教活動に入る 40 年代半ば以前の時期のことだと思われます」「新約聖書における復活証言の中で、もっとも古く、かつもっとも重要なのは使徒パウロの証言。他の証言は、現在残されている形をとるまでに多くの人びとの手を通して伝えられてきたものです。ただパウロの場合に私たちは、復活の目撃証人による唯一の第一次的な証言と関わることができるのです。」**

：①贖罪死、②葬り、③復活、④顕現。①と③には「聖書に書いてある通り」がつく。
どこを指しているのか。

●ホセア書 6章2節　愛の預言書。

6 章 2 節 二日の後、主は我々を生かし／三日目に、立ち上がらせてくださる。我々は御前に生きる。

●ヨナ書 2章1節

2 章 1 節 さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。

●イザヤ書 53章5節 - 12節

紀元前 6 世紀、バビロン捕囚の時に預言者第二イザヤが現れた。イザヤ書 40-55 章（慰めの書）を残す。ここにある 4 つの主の僕の歌（42:1-4、49:1-6、50:4-9、52:13-53:12）の一つがこの苦難の僕。メシア思想を教え、全旧約のなかで最も崇高な宗教的人物像を示す、主イエスの贖罪死の姿を見ることができる（新共同訳聖書辞典）

イザヤ書 53 章 5 節-12 節

彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。／わたしたちは羊の群れ／道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて／主は彼に負わせられた。／苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。／捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか／わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれたことを。／彼は不法を働かず／その口に偽りもなかったのに／その墓は神に逆らう者と共にされ／富める者と共に葬られた。／病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ／彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは／彼の手によって成し遂げられる。／彼は自らの苦しみの実りを見／それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために／彼らの罪を自ら負った。／ それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし／彼は戦利品としておびただしい人を受ける。彼が自らをなげうち、死んで／罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い／背いた者のために執り成しをしたのは／この人であった。

：また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと

文語訳　三日めに甦へり、／口語訳　三日目によみがえったこと、／塚本訳　三日目に復活しておられること、／前田訳　三日目によみがえり、／ NIV　that he was buried, that he was raised on the third day according to the Scriptures,

：復活のキリストの顕現の事実を証拠として列挙している。

マルコ 16　ルカ 24　マタイ 28　ヨハネ 20　使徒言行録 1

塚本虎二著作集第八巻に四福音書の復活記事の一覧表。

マルコ 16:1-8　**あの方は復活なさって、ここにはおられない。（空の墓）**あの方は、あな

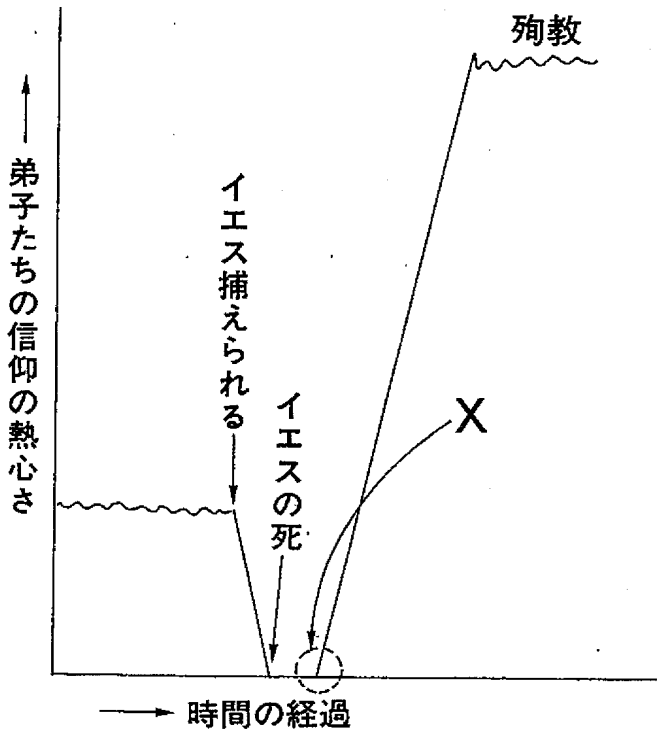
た方より先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる。
ヨハネ 20:11　イエス　マグダラのマリアに現れる。「恐れることはない」
弟子達の反応は、驚く、恐れる、喜ぶ、信じない。
：500 人：マタイ 28 章 16 節「さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そしてイエスに会い、ひれ伏した。」
ガリラヤというのは象徴的。エルサレムではなく、辺境のガリラヤ。
：裏切りの人に顕われるイエス。ペテロ＝三度主を否んだ裏切りの弟子。ヤコブ＝「 次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、」ヤコブは十二使徒の一人では無く「主の兄弟」（ガラ 1：19）と呼ばれ、キリストの死後使徒団に加わり、エルサレムに於てその首位を占め「教会の柱石の一人」（ガラ 2：9）であつた。彼はイエスの復活を見て信ずるに至つたものであろう（ヨハ 7：5）。（黒崎）主なる兄弟のヤコブ。マルコ 3.21 は身内の者たちはイエスを気ちがいと思ってほんとうに取り押さえようとしたと語っているし、ヨハネ 7.5 にはイエスの兄弟達もイエスを信じていなかったと書かれている。かっては彼を残酷に傷つけ後にそれを悔いた人たちに現れた。（バークレー）
そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。
：月足らずについての感想／末娘の切迫早産から今日までまもられたことを感謝する。ゴーバルのスタッフの理解がなければとても協力出来なかった。生まれることにも胎児の積極的な働きがある。その準備が十分でなく生まれるリスクは様々にある。自己の足りないところへのパウロの自覚を想像する。／パウロはイエスと直接に出会った体験はなく、他の使徒らは長年月キリストと共に居りキリストによりて充分に育つて居るのに、パウロは急に新生を経験したから（黒崎）／医師、小説家の加賀乙彦も遠藤周作から「君は無免許運転だね」と言われていた。私も同様にいつも準備不足で、フライングばかりしているように感じることが多い。
15 章 9 節：パウロがユダヤ教に対する熱心から、基督教徒を迫害した事は彼の心に一生医えざる痛を覚えた事であろう。彼が最も偉大なる使徒であつたのに彼をして「最少きもの」と謙遜せしむる原因は茲に在つた。（黒崎）／「教会の迫害者、キリストに対する反逆の只中における神の啓示、神の恵みの強制力による回心がキリスト教徒としての出発点。上からの一方的な力、180 度の逆転」（新約聖書注解Ⅱ）
15 章 10 節：このパウロの感想も同感。ゴーバルは 1980 年から、働いたのは自分ではない。人生そのものが神の恵みが働いているとしか思えない。
15 章 11 節：歴史的記述として是ほど確実なる記述は無い。此の書翰がパウロの書翰である事は何人も疑わない。夫故にキリスト復活の事実は歴史上の他の如何なる事実よりも確実なる証拠を有って居るのである。故に此の事実を否定しなければならない**霊的復活説、幻影説、事実捏造説等、凡てキリストの復活を否定する学説**は、この記事の如き確実なる証拠を自己の想像を以て否定せんとして居るのに過ぎないのであって何等の証明力がない。**基督教は永遠にこの確実なるキリストの十字架と其の復活に其の基礎を置いて居る**のである。
：武祐一郎さんによる、**復活の事実についての図解**　参照　「高校生と学ぶ使徒信条」
第 2 講　イエス・キリストのよみがえり　新教新書 241　新教出版社 1994

付　復活記事比較表

（イエス伝研究 VIII 塚本虎二著作集第参巻）
昭和五十四年 聖書知識社

	マタイ（二八章）	マルコ（一六章）	ルカ（二四章）	ヨハネ（二〇章）
空の墓（復活の朝）	1—10	1—8	1—12	1—18
女たちが行く	1	1—2	1	1
地震	2			
主の使が現れる	2以下	5以下	4以下	12以下
伝言	7、10	7	6—7	17
主に会う	9			
弟子たちが行く				
エルサレムに現れる			(12)	3—10
マリヤに	9	(9—11)		14—18
エマオにて		(12—13)	13—35	
十一弟子らに		(14)	36—43	19—20
トマスに				24—29
ガリラヤに現れる	16—17			二一1—14
伝道命令	18—20	(15—18)	44—49	21—23、二一15以下
昇天		(19)	50—51	
その後の弟子		(20)	52—53	
現れ方				
突然	9	(9、12、14)	15、31、36	14、19、26、二一4
祝福する			36、50	19、21、26
手足を示す				20、27
食事をする			41—43	二一9—13
弟子たちの行動				
驚ろく	4、5、8、10	5、8	22	
恐れる		8	5、37—38	
悲しむ		(10)		11、13、15
喜ぶ	8		33?、41、52	20、28?、二一7?
信ぜず	17	(11、13、14)	11、12、25、38、41	9、25、27

（高校生と学ぶ使徒信条 武祐一郎
新教新書241. 新教出版社 1994.
第2講　イエス・キリストのよみがえり）



：宮田光雄　復活の使信にどう向き合うか　　「私の聖書物語」新教出版社 2014 年（福音と世界　2014 年 4 月号）

パウロの証言から明らかになるのは、キリストの復活は、私たち人間には、それと比較して表現する適切な言葉がまったく欠けた独一無二の出来事だということです。それは神の行為によって死の力が最終的に克服された出来事であり、ただ神の創造の行為に並びうる出来事なのです。復活がいかに行われたか、どのような経過をとったのかということについては、聖書は沈黙したままです。。まさにこの点において、聖書の啓示は、人間の理解や解釈を超えた出来事の秘儀を守っているのです。・・・

キリストの復活は、歴史学的に厳密な意味では歴史的事実として確定できません。復活者キリストと同様に、それは、歴史学的方法を用いて具体的に対象化され認識されるものではないからです。・・・歴史的に確定されるのは、十字架のイエスの死と、その後における弟子たちの復活信仰と復活宣教の事実です。しかし、それはたんなるフィクションとして創作された空想上の事件ではなく、もっとも深い意味で真実な現実的な出来事なのです。そこでは何事も生じていないのではありません！そこに生じた出来事は、歴史の限界を吹き飛ばし、乗り越えています。復活においては、まさに神の行為が問題なのです。それは人間の死の世界から、いっそう広い高い神的次元の世界へ超越する出来事です。**人間的にみれば、いっさいが終わったかにみえるところに神が介入し、復活＝新しい生命が始まるという奇跡です。それは復活者の現実に近づく者にのみ可能となる信仰への呼びかけであり、神から差し出された恵みのオファーなのです。・・・**

おそらくキリストの復活の秘儀に触れうるためには、私たちにとって、これまで確実と見なされてきた認識の枠組み自体が破砕されていなければならないでしょう。この出来事は、外側から客観的に検証しうる事実ではないからです。それは、信仰する者の実存の中へ直接に入ってきます。信ずる者を、その内部から規定し、それを終末論的な実存へと変革してしまうのです。キリストの復活とその顕現は、まさに「切線が円に接触するように」（カール・バルト）しか、歴史の中の事実とはならないのです。」

Ⅱ．第二段落「死者の復活」（12-34）

復活を信ぜざる結果、要するに基督教全体の破壊となる・・・（黒崎）

（1）キリストの復活の事実の否定となり（13 節）。
（2）宣教も空に帰し信仰も無意味となり（14 節）。
（3）使徒自身の人格をすら認めざるに至り（15 節）。
（4）我らの救も希望も根本より覆ってしまうのである（16-19 節）。

15 章 12 節 キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。／15 章 13 節 死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです。

：コリント教会には、自分たちを既に完成した者、既に天的存在に近い者と考え終末時の復活を不必要かつ不可なこととして主張していた。（新共同訳聖書注解Ⅱ）

：コリント人の中に死人の復活を否定する者があつた、**キリストが確実に復活し給えるに死人の復活が無い筈は決して無い。パウロはキリストの復活の中に万人の復活を予見した**

のである。（黒崎）
：バークレー「コリント」による説明；
ユダヤ人達：コリント人は身体の甦りを否定する。サドカイ人は魂の永生と身体の復活を完全に否定する。旧約聖書にも死後の生命への希望はほとんどない。**死後シオル：に行くという考え。（陰府、暗やみの地、忘れられた死者の国。地獄ではなく死者の住み家。）**ヨブ記 19 章 25-26 節。詩編 16.9-11 の例外。
ギリシャ人：魂の不死を信じていた。ところが身体の抹殺消滅完全な解体を伴う。「身体は墓なり」／セネカ「このわたしという混合物が、神的なるものと人間的なるものとに分解する日がきたとき、わたしは自分の身体を地上に残し、わたし自身を神々にお返しすることにしよう」／エピクテトス「神が必要なものを与えてくれぬときは、退却の合図を鳴らしておられるのだ。神は扉を開けて、われわれに来いと言われる。だがどこへ？べつに恐ろしいところへではない。われわれがそこから出てきたところ、われわれに親しく近いところ、つまり四大に帰って行くだけだ。われわれの中なる火は火に、土は土に、水は水に帰って行くのである。」
パウロの見解：クリスチャンにとっては肉体は悪ではなかった。キリストの受肉が行われた以上、肉体は悪ではありえなかった。神の子なるイエスが人間の肉体の形をお取りになった以上、肉体は卑しむべきもの、さげすむべきものではありえなかった。そのなかに神が住みたもうたのだから。したがって、クリスチャンにとっては死後の生命は肉体と魂とをあわせ含む全人的生命である。死後も個人性は存続し、あなたはなおあなたであり、わたしはなおわたしであると考える。死んだときの肉体のままよみがえるとは決して言っていない。霊のからだによみかがえる。人間の個人性が存続するということなのだ。人はなお彼自身であり個人として存続する。これが身体のよみがえりということばでパウロが意味している内容である。霊肉二つながら神性を帯びるにいたるからである。（バークレー）

15 章 14 節　そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です
「無駄」＝「空しい」＝「根拠がない」／文語訳　我らの宣教も空しく、汝らの信仰もまた空しからん、／口語訳　もしキリストがよみがえらなかったとしたら、わたしたちの宣教はむなしく、あなたがたの信仰もまたむなしい。／塚本訳　キリストが復活しておられないならば、わたし達の説教はそれこそ根拠がない。あなた達の信仰も根拠がない。／ NIV
And if Christ has not been raised, our preaching is useless and so is your faith.
：「復活」が宣教及び信仰の中心であると云う事は今日非常に無視され、寧ろ復活は信仰や宣教の妨害であるが如くに考えられて居る。人間の不完全な知識や常識的科学が神の力を無視して居るからである。キリストの復活は彼の神性の証拠である（ロマ 1：4）、彼神の子に在し給うが故に其の十字架の死は我らの罪のための死である事がわかる、従て十字架による我らの罪の赦しも彼の復活に其の基礎を置いて居る。故にキリストの復活なくば十字架の贖も罪の赦もなく我らの宣教の凡ての建物は顚覆してしまうであろう。又キリスト自ら死とサタンとに征服せられ給うたならば、彼を信ずるものも亦同じ運命に帰してしまうであろう。然らば其の信仰は全く**空漠たるもの**ではないか。（黒崎）

15 章 15 節　更に、わたしたちは神の偽証人とさえ見なされます。なぜなら、もし、本当に死者が復活しないなら、復活しなかったはずのキリストを神が復活させたと言って、神に反して証しをしたことになるからです。
：単に我らの宣教が空しきのみならず、進んで我らは神につき偽の証を為すの大罪人となる訳である、福音の使徒か、神の偽証人か、死人の復活の否定は結局此の結論に達せざるを得ない。故に復活を否定しつつペテロやパウロを使徒としてあがめるのは大なる自己撞着であつて、今日の基督者に此の如き状態に居る者は多くある。（黒崎）

15 章 16 節 死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかったはずです。／ **15 章 17 節　そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります。／** 15 章 18 節 そうだとすると、キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまったわけです。／ 15 章 19 節　この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です。

：神がキリストを甦えらせ給いしは、死人をも甦えらせんが為である。故に我らが「神はキリストを甦えらせ給えり」と証するのは結局「神は死人をも甦えせ給わん」と云うと同じ事である。（黒崎）
：　**死は罪の価である（ロマ 6：23）**、故に死人の復活を否定するものは結局キリストの復活を否定する事となり、其の結果キリストは死に打勝つ事が出来ず、罪のために咀われて終り給うたこととなる。若し然らば彼は如何にして他人を義とする事が出来ようか、彼の復活は我らの義のためである（ロマ 4：25）。**キリスト若し復活し給わないならば我らの罪を赦されし証拠は何処にもない、我らの信仰は空しく結局救を得る事が出来ない。**（黒崎）
：十字架上の最後の言葉。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」イエスは絶望のまま死んだのか。人としてはイザヤ書の通りに人の罪を負って死んだ。
：コリント一 10 章 30 節食べ物の問題でコリントの教会で信徒の死が問題となっていた。
：キリストに在りて眠れる者は此の復活の希望を以て逝いた、彼らの希望が空に帰して彼らが亡びてしまうたと云う事は、実に気の毒な事となるではないか、コリントの信者は恐らく其の使徒のあるものが、復活の希望をいだいて勝利の中に眠つたのを見たであろう。
　使徒始め基督者は神の御栄を掲げんが為めに此の世の人以上の正義を行い、此の世の中にあつて悪魔と戦い種々の困難を嘗めなければならない。又キリストは其の愛の故に特に厳しく我らの悪を罰し、又我らを鍛錬せんが為めに特に強く懲しめ給う、又彼らは此の世の快楽に耽溺する事が出来ず之を節制する、又基督者はキリストの名の故に特に人々に忌み嫌われる。**基督者がかく多くの苦難を忍ぶ所以は此の世が万事の終りでは無く、復活によりて来世が始まる事を信ずるからである。若し我ら此の世限りキリストに望をつなぎ、其の以後は消滅してしまうものならば、此の世に於てかく苦しまなければならない基督者は人間の中で最も憫れむべき者である。**（黒崎）

15 章 20 節　しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました。

：**収穫の喜び。もう実っただろうかと初穂を確かめることのワクワク感。そのあとの収穫は時を逃さず一気に行われる。家庭菜園でも、農家でも同じ。信徒の喜びも同じ。**：恰も初穂が刈り取られて全収穫が之に従う事を知ると同じく、キリストは眠れる者の初穂であつて、キリストにありて眠れる凡ての者は、彼に従つて復活する事を知る事が出来る。（黒崎）

15 章 21 節　死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。／ 15 章 22 節　つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。
：ユダヤ人の民族観。ダッカ事件、日本人だと叫んだが犠牲は免れなかった。外に出ると国を代表する。一人の人が民族の責任を負う。アダムとイエスは人類の責任を負う。
：茲にパウロはアダムとキリストとを対照し双方とも「人」であるけれども、全く正反対の働きを為す事を示し、アダムは其の死によりて万人の死の原因となりキリストは其の復活によりて万人の復活の原因となり給える事を示す。万人の復活は信者、未信者の凡てを含むのであつて（ヨハ 5：28 以下黙 20：5）、永遠の栄光に入る為めの復活と永遠の審判に入る為の復活とを含んで居る（黒崎）

15 章 23 節 ただ、一人一人にそれぞれ順序があります。最初にキリスト、次いで、キリストが来られるときに、キリストに属している人たち、／ 15 章 24 節 次いで、世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます。／ 15 章 25 節 キリストはすべての敵を御自分の足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。
：信仰の目で見る歴史観：**復活の順序**は之を三段に区別する事が出来る、**第一段はキリストの復活**であつて是は既に成就し、**第二段はキリストの再臨**であつてキリスト先づ空中まで来り給い、眠れるもの先づ甦り生きて残れる者は聖化する（Iテサ 4：16、17。3：13）。**第三段は今の世の終の審判の時**であつて、凡ての人々の復活と審判が此の時に起るのである。尚 15：51、52。マタ 24：40-41、25：1-30。ルカ 14：15。20：35。黙 19：15、16。20：4-6。世の終末までの光景は次節以下に記されて居る。キリスト再臨による信者の復活の後、世の終が来る迄の間にキリストは王として支配し給い神に敵する凡ての霊的存在を滅ぼし、国より完全に敵を払い清め給う。是れ所謂**千年時代**及其の前後の審判の時代であつて黙 19 章 20 章に詳記せらるる処である、此の千年時代の終りに**万人の復活と審判**がある。**然る後国を父なる神に付し給う、斯くして父は子と共に支配し給う**のである。▲世の終末に於ける是等の状態はキリスト・イエス自身が直接示したのではなく、イエスの言の断片と旧約の予言と又使徒等に示された直接の黙示に由ったものである。（黒崎）

15 章 26 節　最後の敵として、死が滅ぼされます。
：死は神の本質と矛盾せる現象であつて神の敵である。併し乍らサタンと罪の勢力が支配して居る間は死は其の当然の値である（ロマ 5：21。6：23）、故に死はあらゆる権能、権威、権力にもまされる敵であつて、是も当然に亡ぼされなければならないものである。**死が亡ぼされて人は完全なる勝利を有つ（56 節）黙 20：12、13。**（黒崎）

15 章 27 節　「神は、すべてをその足の下に服従させた」からです。すべてが服従させられたと言われるとき、すべてをキリストに服従させた方自身が、それに含まれていないことは、明らかです。
：詩 8：7「御手によって造られたものすべて治めるようにその足もとに置かれました」をパウロはメシヤの支配の預言と解し処々に之を引用して居る。「彼の足下」はキリストの足下であつて、神は万物をキリストの御足の下に服従させ給うた。万物を彼に服わせたりと云えば彼自身は此の服従するものの中に入つて居ない、即ちキリストは神の外何物にも服従し給わず王たる地位を保ち給う、然る後キリストは此の関係に於いて父に国を付し給う。
15 章 28 節　すべてが御子に服従するとき、御子自身も、すべてを御自分に服従させてくださった方に服従されます。神がすべてにおいてすべてとなられるためです。
：万の物神に従う以上子なるキリストも亦神に服い給う事は勿論であつてかくして神は遂に万物の中に内住し之を満し之を支配し給い、天下一つとして神に服わぬものなきに至り、茲に完全なる新天新地（黙 22：1 以下）が実現するのである。此の光景を想像し見よ、如何に雄大荘厳なる光景であろうか、キリストを首に、信者、自然界、並に陰府の中に投入れられし者に至るまで、皆神を仰ぎ神に服う時こそ宇宙の隅々に至るまで讃美の声が挙げらるる時である。此の節に子なるキリストが父に服う事は三位一体の論（三者対等の神と見たる）に矛盾せずやと考うる学者があるけれども誤りである、子なる神は服従が其の本質であり給うのである。

15 章 29 節　そうでなければ、死者のために洗礼を受ける人たちは、何をしようとするのか。死者が決して復活しないのなら、なぜ死者のために洗礼など受けるのですか。
：復活と生活との関係 15:29 - 15:34「もし復活なくば」は原語「さもなくば」にして、其の意味は「もし 20-28 節に示すが如く復活が是等の偉大なる希望と神の経綸の基礎でないならば」と云う意味である。茲に「死人」を三度もくり返して居る中で第一及び第三は霊的に死せる人（マタ 8：22。ピリ 2：1。I テモ 5：6。黙 3：1）である。即ち**キリストを信ずる事によりて霊の新生を経験せざる人を意味する**。元来人間は此の意味に於て皆「死人」であるけれども、キリストによりて救われし者は新なる生命に復活せる事の徴としてバプテスマを受けて居つた（ロマ 6：1 以下）。而して此の新しき生命には新しき復活体を賦与せらるべきものである（42-49 節）。故に「もしやがて復活して神の国に於て神の子となるべき約束が空しいものであるならば、我らは完全なる死人である。かかるものが此の栄光の徴であるバプテスマを受けても何の役にも立たない」。もし死人が復活する事なくば（第二の「死人」は肉体的死人を意味する、マタ 8：22）、今既に死体にも比すべき此の体にバプテスマを受ける事は無意義であろう。
：此の一節は古来無数の解釈が行われた。J・W・ホースレー氏は三十六の解釈を集めたとの事である。其中多く採用せられて居る解釈は（イ）バプテスマを受けずして死せる人の代理として後日生存者が、その死者のために之を受ける事（ロ）特に救われん事を望みつつ目的を果さずに死ねる人がある場合に、後に至り他人が其の死人に逢ひ度しとの望よりバプテスマを受ける事（ハ）殉教の死を遂げて血のバプテスフマを受けかくして死者の

群に入る事等である。何れの解釈にも相応の困難があつて確定する事が出来ない。
：精神的に死ぬ体験を誰もが持つ。その時に洗礼が与えられる。それは復活の希望。

15 章 30 節　また、なぜわたしたちはいつも危険を冒しているのですか。
：（現実に戻って）パウロ及び其の同労者は復活の望を有つて居つたので、如何なる危険をも之に耐える事が出来た。（4：9。IIコリ 4：10、11。11、23-27。ロマ 8：35、36）。
15 章 31 節　兄弟たち、わたしたちの主キリスト・イエスに結ばれてわたしが持つ、あなたがたに対する誇りにかけて言えば、**わたしは日々死んでいます。**
：**内面的には日々に自己に死し、又外面的には死の艱難を嘗めて居る。**但し此の誇はイエス・キリストに在りて之を持つて居るのであつて、自分の力によるのではない。

15 章 32 節　単に人間的な動機からエフェソで野獣と闘ったとしたら、わたしに何の得があったでしょう。もし、死者が復活しないとしたら、／「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ明日は死ぬ身ではないか」ということになります。
：「獣」は猛烈なる敵手、当時パウロはエペソに於て彼らと戦わなければならなかつた、もしそれが「人の如き思にて」唯現世に対する利益、名誉等を望みて為したのであるならば全く何の益にもならない。
：［獣と闘う］実際迫害に逢い獣と闘わしめられたのであるとの解もある、併しローマ市民権を有つ者にはかかる事は禁ぜられて居つたので此の解は不適当である。
：復活なくば信仰のために迫害せられ日々に死する生活を送るよりも、此の引用句の如く現在の快楽安佚を追求して生活する方が遙に合理的である。人は何時死ぬるかすら解らない。そして死後は全く無に帰してしまうならば今かかる苦しみに逢ふ事は無意味である、コリントの信者の堕落の原因は茲にある事を暗示して居る。**「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」なる論語の一節は一見「我らいざ飲食せん明日死ぬべければなり」に比して遙に高尚に見える。併し乍ら我ら死後の目的が不明瞭な場合には唯道を聞くのみで満足する事が出来ない。死後の生命、即死人の復活につき学び得た後であるならば始めて死すとも可なるのみならず、如何なる迫害に遭つて死んでも少しも恨が無いと云う事が出来よう。**

15 章 33 節　思い違いをしてはいけない。「悪いつきあいは、良い習慣を台なしにする」のです。
：「悪しき交際は善き風儀を害うなり」は喜劇詩人メナンダー作タイースの中にある句であつて恐らく当時通用の諺であつたろう。
15 章 34 節　正気になって身を正しなさい。罪を犯してはならない。神について何も知らない人がいるからです。わたしがこう言うのは、あなたがたを恥じ入らせるためです。
：文語訳　**なんぢら醒めて正しうせよ、**／NIV　**Come back to your senses as you ought**, and stop sinning; for there are some who are ignorant of God--I say this to your shame.／真面目になつて覚醒せよとの意。罪を犯すな。汝等のうちに神を知らぬ者あり、我が斯く言ふは汝等を辱しめんとてなり。（直訳）「罪を犯すな、そは〔汝らのうち〕或者は神に関する無智を懐けばなり」「罪」は的より外れる事であつて、此の場合神に関する無智より復活を否定する者が彼らの中にあり、之と交る事により其の結果罪を犯すに至らん事を警戒したのであ

る。そして「神に関する無智をいだく」事は［神を知らぬ］事よりも一層甚しき程度を示し、コリントの信徒のあるものが単に神を知らぬと云うに止まらず此の無智を誇つて自ら知識ありと信じて居つた事を非難し、彼らをして恥ぢしめ奮起せしめんとしたのである。
：故に復活の信仰は決して現在の生活とは無関係なものでは無い。現世の生活に確実なる目標を与えて之を指導する力である。

Ⅲ．復活の体（35-58）

15 章 35 節　しかし、死者はどんなふうに復活するのか、どんな体で来るのか、と聞く者がいるかもしれません。
：パウロはだれもほんとうには何も知っていない事柄について語っている。実証できる事実についてではなく、信仰上の事柄について語っている。基本原理①種の比喩②身体は一種類に限られていない③生命には発展がある。（バークレー）
：多量に嘲弄の心持を含んで居る、今日と雖も同じ嘲弄の語を聞く事が出来る、此の質問は二つに分れ第一は復活の力の原因に関し第二は復活体の性質に関して居る。36-38 は第一の質問に対する答であり 39-49 は第二の質問に対する答である。

15 章 36 節 愚かな人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ命を得ないではありませんか。／ 15 章 37 節 あなたが蒔くものは、後でできる体ではなく、麦であれ他の穀物であれ、ただの種粒です。／ 15 章 38 節 神は、御心のままに、それに体を与え、一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります。
：パウロは茲に穀物播種の例を示し、此の極めて通俗なる事柄の中に復活の方法に関する原則がある事を論じて居る。即ち種を播きて穀物が発芽し発育する場合に三つの原則がある。其の一は播かれし種が死して分解し其の形を失う事、其の二は此の死体より生命が発生する事、其の三は発生せる生命と崩壊せる生命とが、別の形をなして居ると云うことである。之と同じく死体より生命が別の形体即ち復活体となりて顕われるのである。
：神は其の御意のままに（創 1：11）種が死せる後其の生命に別々の体を予えて之を発育せしめ給う。人の復活も之と同様であつて、肉体が死して腐朽するけれども之より新なる生命が発生し、之に対して神は御意のままに体を与え給う、之れ「いかにして甦るべきか」（35 節）との質問に対する答えである。即ち復活は自己の力にも意志にもよるにあらず神の力と神の御旨による事麦や其他の穀物と同一である。▲電子顕微鏡の発達に由って益々明白にされつつある事実は、生命の根源は雌雄の生殖細胞が合して出来た一個の細胞であり、之が分裂して一の個体を形成すると云う事実である。パウロは勿論かかる事実を知らなかったけれども、一個の種粒が土中に腐るとその中から生命が発生する事、そして各種子はその種類に従って神の与え給う通りの形体を取るに至る事実に対し不思議なる神の業を感じた事は、パウロの勝れた達観であった。
：2006 年山中伸弥教授らの京都大学研究グループによって作られた IPS 細胞。人工多能性幹細胞: induced pluripotent stem cells　体細胞へ数種類の遺伝子を導入することにより、ES 細胞（胚性幹細胞）のように非常に多くの細胞に分化できる分化万能性と、分裂増殖を経てもそれを維持できる自己複製能を持たせた細胞。生物学の常識を覆す。生命についてもわからないことがまだまだ多い。神さまの創造の不思議。信仰的事実はいのちについて科

学的事実とは別の次元で人を支え希望を与える。

復活体の性質 15:39 - 15:49

15 章 39 節 どの肉も同じ肉だというわけではなく、人間の肉、獣の肉、鳥の肉、魚の肉と、それぞれ違います。／ 15 章 40 節 また、天上の体と地上の体があります。しかし、天上の体の輝きと地上の体の輝きとは異なっています。／ 15 章 41 節 太陽の輝き、月の輝き、星の輝きがあって、それぞれ違いますし、星と星との間の輝きにも違いがあります。

：パウロは宇宙間の森羅万象を捕え来つて、其の肉（生命あるものの血肉）、体（生物無生物の形体）、光栄（同じくその立派さを）比較し、各動物の間各天体の間又は天体と地上の物体との間に、是等のものが皆一々異つて居り一として同じものの無い事を示して居る、而して是れ決して偶然では無く、神が御意のままに異れる肉、特有の体、種々の光栄をそれらのものに与え給うたからである。

：[肉] sarx と「体」sōma とは、聖書にて常に区別して之を用いて居る。

：詩編 8 を再び思い起こします。

15 章 42 節 死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、／ 15 章 43 節 蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。／ 15 章 44 節 つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。

：NIV So will it be with the resurrection of the dead. The body that is sown is perishable, it is raised imperishable;／塚本訳 恥辱の姿でまかれて栄光の姿に復活する。弱さの姿でまかれて力の姿に復活する。

：NIV it is sown in dishonor, it is raised in glory; it is sown in weakness, it is raised in power;／文語訳 血氣の體にて播かれ、靈の體に甦へらせられん。／塚本訳 （神の霊を持たない）魂だけの体がまかれて霊の体が復活する。魂だけの体がある以上は霊の体もあるわけである。／ NIV it is sown a natural body, it is raised a spiritual body. If there is a natural body, there is also a spiritual body.

:復活体と現在の人体との間にも其の肉、体、光栄、及び生命夫自身に於て劃然たる区別がある。我らの肉は「朽つる」ものであつて、其の構成元素は分解四散して跡を留めない。又之は「卑しき」物であつて、神の聖霊に従う事を欲せず（ガラ 5：17)、絶えず呻吟して居り（ロマ 8：18-23)、又これは「弱きもの」であつて悪魔の力に対抗する事が出来ない。而して之れは「血気」psychē の体であつて人間の生命（いのち）を宿すに適して居る体であるけれども「神の霊」を宿しまつるに足らない。然るに復活体は之に反し「朽ちぬもの」であつて永遠に死滅する事なき組織を以て形造られて居り（神は凡てのものに共の御旨のままに生命の長短を定め給う、故に無窮の生命を与え給う事も亦神の能力の中にある)、又「光栄あるもの」であつて、天の使の光栄にもまさり神の御前に出づるに足るものとなり、又「強きもの」であつて悪魔に打ち勝つ事が出来、而して「霊の体」に甦えらせられて、現在の身体の不完全さが凡て除去せられし完全なる霊の体とせられるのである。故に現在の肉体と復活体とは全く異つたものであつて、神は其の御意のままにかかる不滅

にして完全なる栄光の体を我らに与うる事を得給うのである。［血気］と訳せられし psychikos 語源 psychē は動物の性来の生命（2：14 参照）、及び之に伴う感情を総称して居る。故に「血気の体」とは人間性来の魂及び感情の宿る処の体を意味する。 血氣の體ある如く、また靈の體あり。

15 章 45 節「最初の人アダムは命のある生き物となった」と書いてありますが、**最後のアダムは命を与える霊となったのです。**
：塚本訳　（聖書にも）このように書いてある、「最初の“人”アダム“は魂だけの生きものになり”、最後のアダム［キリスト］は命を与える霊になった」と。／ So it is written: **"The first man Adam became a living being" ; the last Adam, a life-giving spirit.**
：茲にパウロは二種の異れる体を対照しつつ是が聖書に叶える現象であつて、「始の人」即ち人類の始祖なるアダムが「終の人」即ち神の子たるべき者の始祖なるキリストの型である事を述べて、之を証明して居る。即ち始めのアダムは「活ける魂」（創 2：7 には生霊（いきもの）と訳され創 1：20、24 には生物と訳されて居る）であつて人間の魂 psychē が支配して居る生物であり、**終のアダムなるキリストは其の復活昇天により聖霊を降して人々に生命を与うる者となり給うた。故にかくして与えられし永遠の生命には、又それに対する霊の体を復活によつて与えられるのである。**［活ける者］psychē zōsa、living soul の訳、活ける魂を意味す。

15 章 46 節 最初に霊の体があったのではありません。自然の命の体があり、次いで霊の体があるのです。
：是が神の創造の順序であつた、神は先づ血気のもの即ち人間性を創造り給い、之を神の霊に服従せしめんとし給うた。若しアダムが完全に之を行う事が出来たならば、彼の血気の体は次第に霊化して不死の体を得る事が出来たであろう、然るに彼の罪のために堕落して人類はそのまま霊のものとなり得ざるに至つた。故に終りのアダム即ち生命を与うる霊なるキリストによりて、新なる生命を与えらるる必要が起つたのである。故に結局霊のものが後に来る事は神の御旨に叶える順序である。

15 章 47 節 最初の人は土ででき、地に属する者であり、第二の人は天に属する者です。／ 15 章 48 節 土からできた者たちはすべて、土からできたその人に等しく、天に属する者たちはすべて、天に属するその人に等しいのです。／ 15 章 49 節 わたしたちは、土からできたその人の似姿となっているように、天に属するその人の似姿にもなるのです。
：口語訳　すなわち、わたしたちは、土に属している形をとっているのと同様に、また天に属している形をとるであろう。／塚本訳　こうしてわたし達は土の人の姿を帯びたように、（復活の時は）天の人の姿を帯びるであろう。／前田訳　そしてわれらは土の像（すがた）を持ったと同じように、天の像をも持つでしょう。／ NIV　And just as we have borne the likeness of the earthly man, so shall we bear the likeness of the man from heaven.
：神は第一の人、アダムを土の塵より創造り給うた（創 2：7）、故にアダムは土に属し「地的のもの」である。故にアダムより伝わつて来た我らの性来の人、自然人は皆此のアダムと同じ性質を持ち同じ形を取つて居る。即ち性来の我らは皆アダムと同じく死して土に帰

る運命を有つて居る（創 2：19）。
：然るに第二の人キリストは天より降りし者（ヨハ 3：13）であつて、従つて天に属する者即ちキリストによりて贖われて神の子とせられし者は、キリストと似て居りやがてはキリストと同じ形に復活するであろう、故に土に属する性来の人、アダムの子孫は死して朽ち果つべき運命を有ち、天に属し、キリストによりて霊の生命を与えられし者は、死に打勝ちて甦るべき運命を持つことは極めて当然の事である。

再臨の時に生存し居る信者の化体 15:50 - 15:52
15 章 50 節　兄弟たち、わたしはこう言いたいのです。肉と血は神の国を受け継ぐことはできず、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはできません。／ 15 章 51 節 わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。／ 15 章 52 節 最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。
：以下三節に於いて（50-52）パウロは、キリストの再臨の時に地上に生存して居る人々は如何なる運命に逢うのであるかに就いて説明して居る。即ち人間の現在の生命が宿つて居る此の血肉は朽つべきものであつて、不朽永遠なるべき神の国を嗣ぐに足らない。故に若し我らの生存中にキリスト再び来り給わば、此の血肉は如何なる運命に遭うであろうか、是れ次に解決せられし問題である。［血肉］と云いて特に「肉体」と云わないのは理由あることであつて、神の国を嗣ぐのは霊の「体」であるからである。　：此の問題の解決としてパウロの示さんとする処のものは奥義であつて、神の黙示によりて示された処のものである。即ちキリスト再臨の報知として、終のラツパが鳴る時死人は朽ちぬ体に甦り、其の時未だ眠らずに（死なずに）生存して居る信者なる我らは一瞬間にして化して不朽の体を得るであろう。故にキリスト再臨の時に生存して居る者は、其の朽つべき血肉を以つて神の国に入るのでもなく、又一旦死して更に甦るのでもなく忽然として栄光の体に化するのである。I テサ 4：15 参照。
：**「あめつちもゆらぐらっぱのひと声によみがえるらん春のあけぼの（内村鑑三）」**
「我等は来世に就いて若干を示されしか」（復活と来世　大正 6 年 8 月 10 日聖書研究社）
鈴木弼美先生が授業で内村先生のこの歌を紹介され「最も偉大なことは音楽に依ってしか表せないんだね。ヘンデルのメサイアでもトランペットが鳴るでしょう。」
：このパウロの文章＝音楽的な美しさを感ずる。**天地創造とキリストの復活再臨が対比される信仰的宇宙観への転換。神の経綸。**

復活の凱歌 15:53 - 15:58

15 章 53 節　この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。／ 15 章 54 節 この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。**「死は勝利にのみ込まれた。／ 15 章 55 節　死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」／ 15 章 56 節　死のとげは罪であり、罪の力は律法**

です。
：塚本訳　（というのは、神の国に入るためには、）この死滅すべきものが不滅を着、この死ぬべきものが不死のものを着ねばならないからである。／NIV　For the perishable must clothe itself with the imperishable, and the mortal with immortality.
：文語訳　『死は勝に呑まれたり』／NIV　When the perishable has been clothed with the imperishable, and the mortal with immortality, then the saying that is written will come true: "Death has been swallowed up in victory."
：茲にパウロはキリスト再臨の時の栄光を思いて思わず其の心は熱し来り、死に対する勝利の凱歌を奏して居る。即ち「復活栄化が行われ、此の腐朽し死滅すべき肉の体が、朽つる事なく死ぬる事なき体を著る事」は、神の救済の御計画から云えば、是非必要であるからである。而して此の事が実現する場合には、死は勝利のために呑み尽されたのであつて、人は完全に死の上に勝ち誇つて居ることが出来る。**イザヤ書 25：8** は此の意味に於て成就したのである。**「死を永久に滅ぼして下さる。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい、ご自分の民の恥を地上からぬぐい去ってくださる。これは主が語られたことである。」**
：『死よ、なんぢの勝は何處にかある。死よ、なんぢの刺は何處にかある』／NIV　"Where, O death, is your victory? Where, O death, is your sting?"
:**ホセア 13 章 14 節「死よ、お前の呪いはどこにあるのか。陰府よ、お前の滅びはどこにあるのか」**絶対に死に打勝てる者の叫声であつて、復活と栄化により死は全き敗北に陥り、其の毒刺を失つて人を刺すことが出来ないようになつた（26 節）律法なる力が罪なる刺を以て我らを刺し殺す。
：**人をして死に至らしむる刺は罪である、若し罪がなかつたならば死は無かつたのである（創 2：17。ロマ 5：12）。** 創 2.17「ただし善悪の知識の木からは決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」ロマ 5.12「一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。」**而して罪をしてかかる力を持たしむる原因は律法であつた（ロマ 5：13）。即ち律法を与えられて、罪は始めて其の真の性質に於て露わされ、人を殺す刺たるの力となつたのである。**

：「雪に閉ざされて」ホイッティア　根本泉訳　新教出版社　2015
ジョン・グリーンリーフ・ホイッティアの詩を根本泉さんが翻訳。「冬の田園詩」副題。150 年前の詩。ホイッティアはマサチューセッツ州の農場で生まれ育ち、奴隷制廃止運動の先頭にたったクェーカー派の詩人。雪に閉ざされた日、暖炉の前で過ぎ去った家族親しい人を思い浮かべる、この詩の 200 行目に端的に復活の希望が言い表される。新渡戸稲造「武士道」にも引用。
『「愛」は夢み、「信仰」は信じるであろう。いかにしてか、どこかで、きっと会える。
（Love does dream, Faith does trust　Somehow, somewhere meet we must.）』
全訳はこれが初めて。根本さんの日本語訳は大変丁寧で、詳しい訳注や解説もある。
内村鑑三の「一日一生」3 月 31 日。コリントの信徒への手紙一 15 章 53-54。
「愛の夢想をわれ疑わじ、何様（どう）か何処（どこ）かで相い見んと」

15 章 57 節わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝

しよう。
：然るに有り難い事には我らはキリストを信ずるによりて死に打勝つ事が出来る。何となればイエス・キリストの十字架の死によりて我らは我らを刺殺す処の罪につきては死にたるもの（ロマ6：11）となり、我らは最早や罪と死との法より解放たれたのである（ロマ8：2）。而して**キリストの霊は我らを縛つた律法から我らを解放し、自由なる霊の律法に遵つて歩ましめ給うのであつて、我らは之により罪とその力なる律法とより解放たれ、従つて罪の値なる死に打勝つ事が出来たのである、是れイエス・キリストの恩恵によるが故に、パウロは溢るる感謝をささげたのである。**

15章58節　わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦労が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです。
：文語訳　然れば我が愛する兄弟よ、確くして搖くことなく、常に勵みて主の事を務めよ、汝等その勞の、主にありて空しからぬを知ればなり。／口語訳　だから、愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては、あなたがたの労苦がむだになることはないと、あなたがたは知っているからである。
：最後にパウロはコリント信者の復活に関する誤れる信仰にもかかわらず、「我が愛する兄弟よ」と彼らを呼んで居るのであつて、今日の教会の如く**信仰箇条によりて他を審かず、唯彼らを教訓し、而して後は此の復活の信仰を当然のものとして、**

之を無理に彼らに押し付くる如き態度を取らず、唯彼らにすすむるに「主の業に溢れん事」（直訳）を以てした。即ち主のよろこび給う愛の業（16：1以下）及び福音を頒つ伝道の業は勿論、其他如何なる小さな業でも主の賦課し給う事をば之を努めて溢るるばかりならん事をすすめて居る、是れが主の再臨の時の為めの最上の準備である。再臨に関する知識のみでは足りない。そして其の理由はかかる業こそ主にある業であり、内容の充実せるものであるからである。他の凡ての業や知識は之に比して皆空しきものに過ぎない。
（黒崎）
藤尾正人さんのパウロ理解
「ぶらんこに乗ったパウロ」こそ、私のキリスト理解の鍵　藤尾正人
ぶらんこの二本の綱の一本は「キリストの十字架」、もう一本は「キリストの復活」です。下の踏台は「キリストの救い」。そして一番上で「父なる神とキリスト」に固く結ばれています。そしてパウロは、十字架と復活を握りしめ、救いの土台に乗り、神とキリストに固く結ばれつつ、すべてのことが許されている「自由」の風を切り、ぶらんこを漕いだのです。私たちクリスチャンも、このぶらんこに乗るのです。どんな教会に属しているか、どんな礼拝をしているか、どんなバプテスマか、カトリックか、プロテスタントか、そんなことから自由になって、ただ十字架と復活を握り、楽しく、大きく、ぶらんこを漕ぐのです。その私たちの後ろに、キリストご自身が一緒にぶらんこを漕いでくださるのです。私たちの手を大きな手でにぎりしめて。そうです、「福音とは何か」と聞かれたら、「ぶらんこに乗ることだ」と答えればいいのです。（「ぶらんこに乗ったパウロ」藤尾正人　白鷺えくれ舎2000年）

＊イエスは主なり

奥山正夫さんの「イエスは主なり」

讃美歌集「イエスは主なり」ここから以前「幸い薄く見ゆる日に」を紹介。奥山さんの作詞作曲でイエスは主なりという歌があります。独立学園桝本華子先生から教えて頂きました。その娘さんがあるところで書いています。「父、奥山正夫は、（２０１１年）大地震3日後の3月14日に89歳の生涯を閉じました。6年前から脳腫瘍をわずらい、闘病生活を続けていました。父は、フェリス女学院短期大学で教鞭をとる傍ら、横浜クリスチャンコワイアをはじめ、数々の聖歌隊やコーラスの指導をおこない、コワイヤを率いて全国各地の各種施設を慰問して、賛美奉仕を行ってきました。また、海外の民謡やカロルの訳詩をしたり、自ら作詞作曲したりして、いくつか歌集も出しています。「大波のように」をはじめ、賛美歌第2編、新聖歌などにもいくつかの訳詩曲が収録されています。賛美を通じての奉仕は父の生涯の仕事でした。」

イエスは主なり歌詞

「悔いの涙も洗うを得ざる罪のしみにて汚れし我をイエスは血をもて清め給えり。」

「イエスは主なり、我そのしもべ、御旨のままに為し給え」（＊繰り返し）

「世のいざないに惹かるる時も、嫉み怒りを覚ゆる時もイエスは強めて勝たしめ給う」

「我が行く末の禍幸知らず、されどこの身は汝がものなれば、任せまつりて恐れはあらじ」

●ローマの信徒への手紙 10章9節

10章9節 口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。

●コリントの信徒への手紙一13章12節13節

わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきりと知られているようにはっきり知ることになる。それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

●フィリピの信徒への手紙3章10、11節「わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」

（参考）

黒崎幸吉 註解新約聖書WEB版／矢内原忠雄「復活の論証」全集第八巻
塚本虎二 イエス伝研究 第八巻／政池仁 著作集6 パウロ書簡講義
太田愛人 コリントの手紙NHKこころを読む1996／パウロの手紙 こころの時代2007
G．タイセン 新約聖書 教文館2003／バークレー コリント ヨルダン社 1970
宮田光雄 私の聖書物語 新教出版社 2014 / 内村鑑三 聖書注解全集11巻
武祐一郎 高校生と学ぶ使徒信条 新教新書241 新教出版社1994